

京都府長岡京市の特別養護老人ホーム旭が丘ホーム。田中サチ(仮名)が手招きすると、ラブ(ラドル・レトリバー種)の雌「ラブ」が駆け寄ってきた。「かわいいでしょ、この子」と目を細めるサチに、ホームの女性職員が「おばあちゃんの娘みたいだもんねえ」と笑いかけた。

痴ほう症状が進行していたサチが、夫と一緒にホームに入ったのは二年前。サチは「なんで私がここにいるの」と何度も職員に問いただした。問もなく夫は病死、その後、職員の高齢に反応しない日が続いた。

昨年夏から、変化が起きた。早起きして、庭で飼っているラブに近づき、何ごとか話しかけるようになった。ホームがラブの出産を試みた時も、母親のように気をもみ、失敗と分かると「この子の赤ちゃん、見たかったのに……」と本当に残念そうな表情を見せた。

ラブは五年前、獣医師らでつくる社団法人・日本動物病院福祉協会(東京都文京区)から、動物との触れ合いを通じて心や体の健康を回復させる「コンパニオン・アニマル・パートナーシップ・プログラム」の一環で贈られた。この活動は一九七〇年代に米国で始まり、お年寄りの血圧が安定したり、手足の動きがよくなるなど「動物治療」の効果が認められている。

同協会は八六年以来八百回以上、犬などの動物を連れて施設や学校を訪問してきた。昨年七月、東京で開かれた協会主催の大会では、言葉が失っていたアルツハイマー性痴ほうの女性が犬に触れていて、突然「温かいね」と話し始めた▽重い痴ほう症の男性が「今度、犬はいっつ来る?」と尋ねた――など、顕著な例が報告された。

核家族化が進み、お年寄りは生きがいでもあった「子育て」孫の

老いに挑む ②

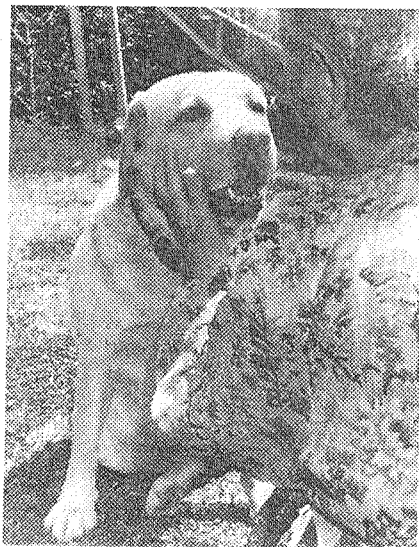
動物が開く心の扉

お守りの役割を失った愛情を注ぐ対象にも乏しい。だが、日本の現実には家族が同居していれば、介護してあげれば解決する、という状況にはない。

老人や障害者の問題に詳しい北野誠・桃山学院大助教授は「愛情を注ぐ対象を動物にしてみるのも、一つの方法。何もかも与えられる生活ではなく、与え、与えられるような関係が、お年寄りにとって大切なから」と話す。

サチには実子がいない。ホームを訪れる身寄りもほとんどない。ラブが心を通わせる

老人の自立、在宅介護を支援する「シルバー愛の手募金」を特設ダイヤル(0990・505・294)と毎日新聞大阪社会事業団で受け付けています。同事業団は〒530-51(住所不要)郵便振替・大阪7の12891。



ラブが生涯の伴侶——動物がお年寄りの心を開くさせる力に——京都府長岡京市の旭が丘ホームで